

大山町農村地帯の飲酒の実態調査

富山県農村医学研究会

石田 礼二, 中川 秀幸, 小川 忠邦,
草野 亮

近年の日本人のアルコール類摂取量の増加は著しく、過去20年間で酒類の販売量は5倍に達している。アルコール摂取の増加は、アルコール過飲に基因する臓器障害や、アルコール依存症の増加につながり、社会問題となっている。日本では飲酒は古くから文化にとけこみ、冠婚葬祭などの行事にはなくてはならないものであった。又日本には晩酌という独特の飲酒形態がある。さらにいわゆる付き合い酒の習慣も多く、飲酒の形態もその生活地域の風習などにも左右されると考えられる。私たちは農村地帯に居住する住民の飲酒の実態を把握し、健康との関連を明らかにする目的で、今回は大山町で調査を行なったので、ここに報告する。

調査方法

昭和61年3月、大山町の農村地帯に居住する男性について、飲酒に関するアンケート調査及び健康診断を行なった。アンケート調査は、共同研究者の草野らが富山県民について行なったアンケート内容に準じた。健康診断は問診、一般診察、血圧、検尿、採血による

表1 検査項目

1	GOT	6	TTT
2	GPT	7	ZTT
3	Al-P	8	Ch-E
4	LDH	9	T-Cho
5	γGTP	10	TG

生化学検査である。生化学検査の項目は表1の通りである。

調査対象

アンケート実施者は127人で、その年齢分布は表2の通りである。30才台から60才台まで、比較的平均している。健康診断をうけた人は

表2 年齢分布

年齢	人数	%
20～	11	8.7
30～	32	25.2
40～	24	18.9
50～	21	16.5
60～	28	22.0
70～	11	8.7
計	127	100.0

表3 家業

家業	人数	%
農業	96	75.6
その他	31	24.4
計	127	100.0

そのうち111人であった。

家業別に農業とその他に分類してみると、表3の通りで、農業の人が75.6%を占めていた。本人の職業については、表4にみられるように、勤務労働者が51%と半数を占め、農林業の人は37人、29.1%であった。

結果並びに考察

アンケートの結果については、草野らの行なった富山県民の飲酒の実態調査、一般成人男性の結果と比較しながら考察してみる。

1. 飲酒頻度と飲酒量 (表5, 6, 7)

週に何日酒をのむかという頻度を、家業別

表4 職業

職業	人数	%
農業	37	29.1
勤務者	65	51.2
自営業	8	6.3
日雇	4	3.1
自由業	3	2.5
その他	5	3.9
無職	5	3.9
計	127	100.0

表5 飲酒頻度 (): %

頻度	農業	その他	計	県民(%)
毎日のむ	41(42.7)	15(48.4)	56(44.1)	41.6
週4～6日	17(17.7)	4(12.8)	21(16.5)	14.4
週1～3日	14(14.6)	6(19.4)	20(15.7)	22.2
のまない	21(21.9)	6(19.4)	27(21.3)	20.3
以前のんだ	3(3.1)	0(0)	3(2.4)	1.5
計	96(100)	31(100)	127(100)	100.0

表6 飲酒頻度と晩酌量 (): %

頻度	毎日のむ	週4～6日	週1～3日	計	県民(%)
1合以下	11(20.0)	6(28.6)	12(60.0)	29(30.2)	32.1
1～2合	30(54.6)	12(57.1)	6(30.0)	48(50.0)	48.5
2～3合	12(21.8)	3(14.3)	2(10.0)	17(17.7)	16.0
3～4合	2(3.6)	0(0)	0(0)	2(2.1)	2.9
4～	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0.5
計	55(100)	21(100)	20(100)	96(100)	100.0

表7 酒の種類

種類	順位	1位	2位	3位	4位	5位
日本酒		87	14	5		
ビール		27	34	3		
焼酎		1	3	5	12	1
ウイスキー		5	4	20	6	
その他					1	12

に比較してみると、毎日のむ人は44.1%であり、週4日以上のみ高頻度飲酒者は60.6%を占めた。一般県民の調査ではそれぞれ41.6%、56.0%であり、特に大きな差はなかった。家業別では農家は60.4%、その他61.3%と差はなかった。晩酌の量についてみると、日本酒に換算して1回1合から2合が50%を占めており、飲酒頻度の多い程晩酌量の多い人が多くみられた。この結果は一般県民の結果と特に差はなかった。尚酒の種類については、日本酒を好む人が非常に多く、2位はビールで

あった。

4. 酒席の飲酒(表8, 9)

酒の席に出る機会があった場合の出席状況は、必ず出席すると答えた人が8.3%であり、普通と答えた人を入れると、95.8%の人が機会があれば出席するようである。これは付き合いの良いことを意味しているが、一般県民の調査の91.7%と差はない。宴会でのむ酒の量は、2～3合が29.5%と最も多く、晩酌の時よりは量が増えるようである。これは一般県民でも同様であった。

5. 初めてのむ(表10, 11)

初めて酒をのんだ年齢をみると、10才台が66.7%を占めている。一般県民の調査では、10才台52.3%であり、今回の調査の方が多い。農家では家庭でのむ人が多いため、10才台からその機会が多いのかもしれない。しかしそのきっかけをみると、表11の通りで、付き合い45.8%、行事33.3%で一般県民と変りなく、農村地帯では10台になると、いろいろの行事

表8 酒席への出席

酒席	数	人数	%	県民%
必ず出席	10	8.3	11.1	
普通に出席	105	87.5	80.6	
さける	4	3.3	7.1	
ことわる	1	0.8	0.9	
機会なし	0	0	0.3	
計	120	100	100	

表9 宴会でのむ量

量	数	人数	%	県民%
1合以下	15	12.3	12.1	
1～2合	22	18.0	21.6	
2～3合	36	29.5	28.0	
3～4合	22	18.0	19.0	
4～5合	15	12.3	11.8	
5合以上	12	9.9	7.5	
計	122	100	100	

表10 初飲年令

年令	数	人数	%	県民%
10～	80	66.7	52.3	
20～24	32	26.7	40.5	
25～29	5	4.2	7.2	
30～	2	1.6		
40～	1	0.8		
計	120	100	100	

表11 飲酒のきっかけ

きっかけ	数	人数	%	県民%
つきあい	55	45.8	42.3	
行事	40	33.3	32.4	
何となく	10	8.3	9.9	
仕事上	8	6.7	7.1	
一人前	5	4.2	3.8	
親のすすめ	2	1.7	1.9	
計	120	100	100	

や、付き合いに出る機会が多くなるのであろう。

6. 飲酒の習慣 (表12, 13)

飲酒の習慣のついた年令は、20～24才が31.2%をもっとも多く、25～29才を入れると、49.5%が20才台で習慣をもつようになっている。そのきっかけは、付き合いが45.9%ともっとも多く、次で何となくの26.6%となって

いる。20才台は付き合い酒が多いことがわかる。

7. 現在のむ理由 (表14)

一番多いのは疲れをとるの45.3%であり、次でたのしむの30.8%であった。一般県民の場合も順位は同じであるが、疲れをとると答えた人の比率は農村地帯の方が多くみられた。疲れたときの一杯は、楽しみにもつながるのであろう。

8. 飲酒の状況 (表15, 16, 17)

いつ頃飲むかの質問には90.4%が晩と答えている。日中のむ人は比較的少ない。のんでいる時間は30分以内がもっとも多く、41.7%を占め、10分以内も入れると66%であった。のんでいる時間は比較的短いようである。飲酒時の食べ物についての質問では、食べないと答えた人は3.3%と少なく、おかずだけが31.4%、おかずもごはんもたべると答えた人

表12 のむ習慣

年令	数	人数	%
10～	19	17.4	
20～24	34	31.2	
25～29	20	18.3	
30～	16	14.7	
40～	20	18.3	
計	109	100	

表13 習慣のきっかけ

きっかけ	数	人数	%
つきあい	50	45.9	
行事	12	11.0	
何となく	29	26.6	
仕事上	11	10.1	
一人前	2	1.8	
親のすすめ	2	1.8	
その他	3	2.8	
計	109	100	

表14 のむ理由

理由	数	人数	%	県民(%)
疲れをなおす	53	45.3	33.3	
たのしむ	36	30.8	27.7	
付き合い	29	24.8	21.5	
眠るため	15	12.8	7.1	
食欲	7	6.0	3.1	
元気を出す	7	6.0	3.9	
他	1	0.9	1.4	
計	117	100	100	

表15 飲酒時刻

時刻	人数	人数	%
朝		0	0
昼		2	1.7
晩		104	90.4
朝昼		0	0
朝晩		0	0
昼晩		4	3.5
朝昼晩		0	0
ねる前		5	4.3
計		115	100

表16 飲酒時間

時間	内訳	人数	%
10分以内		28	24.3
30分以内		48	41.7
30～60分		22	19.1
1～2時間		15	13.0
2時間～		2	1.7
計		115	100

表17 食べ物

内訳	人数	人数	%
食べない		4	3.3
つき出し		22	18.2
おかず		38	31.4
おかずとごはん		57	47.1
計		121	100

は47.1%と、飲んでもきちんと食事をしている人が多いようである。

9. 酒と人生 (表18, 19)

酒の上での失敗はつきものであるが、約40%の人が何らかの失敗をしている。これは一般県民より多い。他人に何らかの迷惑をかけたが14.8%と多多少も多く、次で欠勤が12.2%であった。一般県民の場合も他人に迷惑をかけたが9.6%と一番多いが、欠勤は0%であった。

表18 酒で失敗

内訳	人数	人数	%	県民(%)
交通事故		4	3.5	1.3
仕事上		2	1.7	2.6
他人に迷惑		17	14.8	9.6
けが		2	1.7	4.0
けんか		5	4.3	4.8
欠勤		14	12.2	0
その他		5	4.3	0
なし		70	60.9	77.7
計		115	100	100

表19 酒は必要か

内訳	人数	人数	%	県民(%)
必要		34	26.8	37.1
時に必要		74	58.3	55.5
不必要		14	11.0	2.6
分らない		5	3.9	4.8
計		127	100	100

酒は人生に必要なかとの質問に対しては、表19のごとく、必要と明確に答えた人は26.8%で、一般県民の37.1%に比べて少ない。酒の上での失敗の多いことからみて、社会生活における酒の役割について、考え方にきびしきがあるのであろう。

10. 健康状態 (表20, 21, 22)

現在の健康状態についての質問に対し、悪いと答えた人は15.8%と多くはない。現在治療中の人は27人、21.3%であったが、肝疾患で治療中の人は3人であった。疾患の中では高血圧症が12人と多かった。現在の自覚症状についての質問には、腰痛、肩こり、疲労を訴える人が多かった。家業では農家の人に疲

表20 健康状態

健康状態	人数	人数	%
非常に良い		8	6.3
大たい良い		34	26.8
普通		65	51.2
多少悪い		19	15.0
非常に悪い		1	0.8
計		127	100

表21 治療

内訳	人数	人数	%
治療中		27	21.3
いゝえ		100	78.7
計		127	100

表22 現在の症状

症状	家業		職業		合計
	農	他	農	他	
疲 勞	25(26.0)	5(16.1)	5(13.5)	25(27.8)	30(23.6)
腰 痛	25(26.0)	8(25.8)	14(37.8)	19(21.1)	33(26.0)
肩こり	26(27.1)	8(25.8)	11(29.7)	23(25.6)	34(26.8)
動 悸	7 (7.3)	2 (6.5)	5(13.5)	4 (4.4)	9 (7.1)
その他	20(20.1)	15(48.4)	13(35.1)	22(24.4)	35(27.6)
な し	35(36.5)	9(29.0)	10(27.0)	34(37.8)	44(34.6)
人 数	96	31	37	90	127

(): %

労が多く、職業では農業の人に腰痛が多くみられた。

11. アルコール中毒 (表23, 24, 25, 26)

アルコール中毒についての認識を知るための質問を行なった。アルコール中毒とはどのようなものをさすかという間に「酒をやめられない人」と答えた人が第1位で、70.7%を占めた。これは県民調査の49.0%を大きく上廻っている。比較的正しい考え方をもっているといえる。又アルコール中毒を見たことがあるかという間には、46.8%の人が見たと答えている。又見たときの気持ちについては、かわいそうと答えた人が47.5%あり、これは県民の調査とほぼ同じであった。アルコール中毒者に対して比較的寛大な考え方の人が多いといえよう。アルコール中毒の治療については、積極的に治療すべきであるという考え方の人が65.5%を占めた。

12. 肝機能異常者 (表27, 28, 29, 30)

肝機能検査で、検査値に何らかの異常を認めた人は、111人中24人、21.6%であった。これを家業別でみると、農家の人は24.7%、そ

他の家業の人は11.5%の異常率で、農家に多くみられた。本人の職業別でみると、農業をしている人は8.6%、他に勤務しているサラリーマンの人は29.6%の異常率であり、農業の方が少なかった。家業が農家で職業が農業の人は33人いたが、異常者は3人、9.1%であり、家業が農家で、職業がサラリーマンの人36人中、異常者は13人、36.1%であった。即ち農家であって他に勤務している人の方が、農業だけの人より肝機能異常者が多い。兼業のため過労となっているのかもしれない。

飲酒頻度、飲酒量との関連をみると、飲酒頻度の多い人、飲酒量の多い人に肝機能異常者の出現率は高い。

尚γGTP高値の人は20人であった。

総 括

今回の調査は対象が127人と少なく、農村住民の飲酒の実態としては、ほんの一部をかいまみにすぎない。しかし草野らの行なった一般県民男性の調査と同じ内容のアンケート調査を行ない、比較することができた。

表23 アルコール中毒者とは

内訳	人数	人数	%	県民%
精神者		15	12.2	14.7
落伍者		6	4.9	13.6
内臓病		4	3.3	5.7
酒ぐせ悪い		11	8.9	11.1
酒やめれぬ		87	70.7	49.0
計		123	100	100

表24 アルコール中毒者を見たこと

有無	人数	人数	%	県民%
あ る		59	46.8	58.1
な い		44	34.9	32.9
分らない		23	18.3	9.0
計		126	100	100

表25 みたときの気持ち

内訳	人数	人数	%	県民%
気持ち悪い		9	11.3	11.2
おそろしい		21	26.3	33.2
かわいそう		38	47.5	48.4
愉快になる		2	2.5	2.3
その他		10	12.5	4.9
計		80	100	100

表26 治療について

治療	人数	人数	%
積極的に		78	64.5
家族の意志		4	3.3
本人の意志		35	28.9
放任		1	0.8
その他		3	2.5
計		121	100

表27 肝機能異常者
1：家業との関連

家業	人数	人数	異常者	%
農 業		85	21	24.7
そ の 他		26	3	11.5
計		111	24	21.6

表29 肝機能異常者
3：飲酒頻度との関連

頻度	人数	人数	異常者	%
毎 日		51	13	25.5
週 4 日		16	4	25.0
週1～3日		16	4	25.0
のまない		25	2	8.0
昔のんだ		3	1	33.0
計		111	24	21.6

農村地帯では、生活習慣、社会習慣上の集団的飲酒は、都市より多いことが考えられる。今回の調査では、まだはっきりした実態はつかめなかったが、今後地域を増やし、対象人数を増やすことによって実態を把握したい。又女性の飲酒の増加もいわれており、その面での調査も検討したい。

結 語

私たちは大山町農村地帯に居住する男性、127人について飲酒の実態調査と健康調査を行ない、すでに行なわれた一般県民の実態と比較し、次の所見をえた。

1. 週4回以上の高頻度飲酒家は60.6%で、一般県民との間に差はなかった。又家業別では、農家とその他の家業の間にも差はなかつ

表28 肝機能異常者
2：職業との関連

職業	人数	人数	異常者	%
農 業		35	3	8.6
勤 務 者		54	16	29.6
そ の 他		22	5	22.7
計		111	24	21.6

表30 肝機能異常者
4：飲酒量との関連

飲酒量	人数	人数	異常者	%
のまない		22	2	9.1
1合以下		27	1	3.7
1～2合		44	2	27.3
2～3合		15	7	46.7
3～4合		2	1	50.0
4 ～		1	1	100.0
計		111	24	21.6

た。

2. 酒席には91.7%の人が機会があれば出席し、一般県民との間に差はなかった。

3. 初飲年令は10才台が多く、一般県民より年令が低かった。

4. 飲酒の理由については、疲れをなおすためが多かった。

5. 肝機能異常者は、農家であって他に勤務している兼業者に多かった。

文 献

- 1) 草野亮他：富山県の飲酒を考える、富農医誌、第13巻 52頁、昭和57年
- 2) 草野亮他：富山県民の飲酒実態調査、とやま県医報 No848 昭和58年